

し、木陰では、樹木の冷却効果により、気温が上がりなかつたためといえる。日中の気温差は、天候によって左右され、晴れている日ほど日中の気温差の変動幅は大きく、雨が降っている日ほど日中の気温差の変動幅は小さいことが分かった。また、夜間の気温差は小さく、天候によって気温差に大きな変化が現れることは無かった。

ミクロスケールでの観測だったにも関わらず、

気温は観測地点の周辺環境に大きく左右された。気候変化がより気温に反映されるのは芝地での観測点であり、周辺に障害物がない地点の方が天候と気温の関係を調べるのに適していると考えられるが、季節が夏の1ヵ月に限定されているため、観測地点を定めるための参考とするには、他の季節での気温変化の実情や他の特徴のある観測点での観測を行う必要がある。

靖国神社における表象の歴史

田代光恵

「靖国神社」というと、何を一番始めに思い浮かべるであろうか？

政治？外交？参拝？思想？歴史？どれもあてはまって、実はどれも大切なことを見落としている。本論文の研究動機はここにある。靖国神社という場所であるにも関わらず、場所に関する研究はほとんどない。そこに論点を絞っている。

この大切なこと、とは靖国神社の「空間的多様性」であり、一元化された価値ではない「包容力」である。本論文では、靖国神社の創建当初からの歴史に沿いながら、その「多様性」と「包容力」という側面を描き出す。たとえば、明治期の境内では、相撲や競馬、サーカス、観覧車など今では考えられないような催し物が招魂祭の度に開かれていた。民衆が多く集う、遊興の空間だったのである。それが、日本のナショナリズム、軍国主義が台頭する中で、そのような催しも消えていき、一元化された空間へと変質する。

そこで、なぜ明治期にはそのような特性を持ちながらも、それがなおざりにされてしまっ

ているのか、と言うことに対して考察を加える。戦争という国家的事業と密接に絡み合うことで靖国神社が果たしてきた役割。それを追うことで現在イメージされやすい靖国神社の姿が浮かんでくる。

現在イメージされやすいことの1次データを集めるためのインタビューや、アンケートも行っている。その中では、多種多様な言説を靖国神社が抱え持っていることが分かる。そして、民衆の空間として再び生まれ変わろうとしている、靖国神社自身の姿も浮かび上がってくる。

靖国神社を調べれば調べるほど、固定化された価値観に収まりきらない柔軟性、包容力、開放性、自由を感じる。本論文の中ではそれを逐一紹介しており、靖国神社を思想などから離れてそれ自体、一つの場所として考えるときの良き材料となると思っている。

私個人の靖国神社に対する考えはまだまとまっていないが、そのような中途半端な存在をも靖国神社は受け入れてくれる空間性を持っていることを最後に述べている。

東京論—如月小春の身体論を通して

田中真実

東京が大きく変化した高度経済成長期に幼少期を過ごし、そこで得た感覚を演劇の中で表現し、子どもたちとのワークショップをライフワークと

した劇作家、如月小春の視点を通して東京という都市を捉えていく。

如月小春をテーマにした理由は大きく3つある。

まずは世代の問題である。直接的に第二次世界大戦を体験している訳でもなければ、全共闘運動の真っ只中にいたわけでもない。その感覚は私たちの世代に非常に近いものがある。次に女性であるということ。如月はジェンダーという言葉自体は使ってはいないが、指摘していることは現代のジェンダーの問題に大きく関係している。そして3つ目に東京出身であるということ。私が日ごろよく聞く東京論は地方出身者が語る外部の目から見た東京である。しかし、如月は内側から自分がいる場所を見ている。地方出身者とは違い、比較すべき何かがあるわけではない。そこに存在しているからという理由だけで都市を記述し、表現していく。

そして、如月の都市を見つめていた目は1986年ごろから子どもと演劇に向けられるようになる。数々の子どもたちとのワークショップを行うことで、芸術と社会を結びつけていった。特に姫路の兵庫県立こどもの館でのワークショップ

は、はじめは大いなる実験であったが今も継承され前を進み続けている。

他者を求めること、それこそが如月は都市を見る中で行ってきたことである。如月が演劇、ワークショップ、数々の著作のなかで行ってきたことは、自分自身でもある都市の中で他者を求めることであったのだ。

東京という都市はたった一つの理論で語られるほど簡単な構造をしてはいない。どこか一カ所をとってこれが東京です、と言いきることはできない。しかし、どれをとっても東京である。いわばモザイク状の都市なのである。そんなモザイク状の都市である東京を知るためには東京を知る人、ひとりひとりの視点を借りて東京を再現していくより他に方法はないのではないだろうか。他人の経験を自分のものとして捉え、複合して東京らしきものを考えていくより他に、東京に近づく方法はないのかもしれない。

都市の空隙を埋めるアート活動と地域の活性化 — Central East Tokyo2005 を事例に —

玉 木 亜友美

東京の至る所で、使われなくなったオフィスビルや空き倉庫、空き店舗などが見られる。これらは、都市空間の変容の過程で発生してきたものだが、特に近年、丸の内や六本木などに代表される大開発の裏で、元気をなくし、そういった都市の空隙とも言える空間が問題となっている地域がある。

こんな中、既存ストックの有効活用という考えのもと、空きオフィスから住居へ、空き倉庫から各種施設へとといった様々な用途転換が見られるようになった。そういった、都市の中で空いてしまった空間の新たな活用法の一つとして、本論文ではギャラリースペースという用途に注目した。

空きビルなどを使ったアート活動は、町なかで行われることから、地域の活性化やまちづくりといった目的を持つことが多い。本論文で取り上げるのは、そういった空きビルを使ったアート活動とまちづくりが結びついたイベント、セントラルイーストトーキョー2005 (CET05)

である。このイベントは、かつて東京の中心だった場所、神田、日本橋、馬喰町といったエリアに散在する空きビルをギャラリー化するというイベントで、今年で3年目を迎えた。今回は、イベントの主な開催地である千代田区、特に神田エリアに注目した。神田は、神田明神に見られるような伝統や町会同士のつながりが残る一方で、かつての職人の町としての性格は廃れ、空きビルが目立つという問題を抱えている。

このイベントは、外から人を呼び寄せ、この地域を知ってもらい良い機会になったと同時に、空きビルの持つ新たな可能性を提案する「投げかけ」にもなった。また、アーティストは神田という場所や空きビルという空間に魅力を感じて参加し、自分の表現活動で生まれる思わぬ効果も楽しんでいた。一方で、物件のオーナーからの厳しい条件によってアーティストの表現活動に障害が出たり、地元の閉鎖的な性格やCETという運動の特徴から地元をうまく巻き込めなかったりといった問題が見えてきた。